

奉納物等で見えるローカル地域の神社空間の景観変化

— 筑紫平野の事例 —

黒 木 貴 一

I. はじめに

鳥居を通り灯籠に囲まれながら進み、途中手水舎に立ち寄り身を清め、そして狛犬が左右に座す地点まで進むと拝殿に至る、という神社の参拝までの流れを現代の私たちは思い浮かべる。この途中よく観察すると、灯籠の火袋は欠損し、刻まれた文字は苔生して読めず、拝殿材が痛む様子を目の当たりにすることはないだろうか。またそこに定型と思われる以外で参拝とは関係の薄い、人物や生物の奉納物や石碑などが見られることがあり、またそれらも傷みが目立つ。特にローカル地域において少子高齢化が進み限界に近付きつつある集落では、奉納物の痛ましい姿を露呈する神社は少なくなく、一見健全に見える神社空間には穏やかに、しかし確実に衰退し消滅に向かう兆しが今日認められる。

近年の災害調査で安全な地形・地質を検討する中で、被災地にあって被害を免れた神社を多く確認した。2011年東北地方太平洋沖地震では微高地で津波被害を免れた浪分神社、2012年九州北部豪雨では人工盛土で高められた水天宮、2016年熊本地震では断層崖上の潮井水源の祠、そして2017年九州北部豪雨では山地域の地すべり地で土石流被害を免れた高木神社群¹⁾である。高木神社群を拝する被災地集落の多くは三郡山地内にあり交通不便な土地で、その復旧が困難な場所が多い。そればかりではなく、被災が移住を考える契機となる場合もあり、神社空間のみならずそれを支える集落の持続さえも危ぶまれる。この自然災害に柔軟に対応できる地形条件を探る検討の延長で、ローカルで長期に維持されてきた神社空間の現状を福岡県筑紫平野で確認する機会を得た²⁾。結果、既報²⁾では、奉納年で見ると奉納物には明治維新以降に長期的な個数変動があるが、その中に自然災害の復旧に関与した短期的な奉納集中時期がパルス状に紛れ込むことが明らかになった。神社空間は、伊能

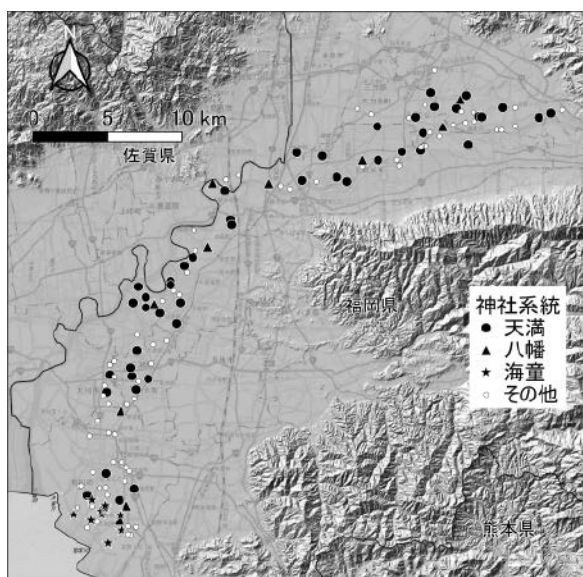


図1 対象地の神社分布

図や地形図に200年以上続く記号をもつ日本の代表的な文化景観でもあるが、しかし今日社会構造の変化に自然災害が追い打ちをかけ、ローカル地域ではミレニアム規模の文化財消滅が近づいている。そこでローカル地域での神社奉納物の長期的な個数変動から見た文化財としての資料的価値と持続が困難な現状を報告したい。

Ⅱ. 神社奉納物の調査と編集方法

筑後川近傍で沖積低地にある神社、筑紫平野の139社（図1）を対象とした。神社は天満系が46社、八幡系が10社、海童系が10社、その他が73社であり、合計1940個の奉納物を確認した。奉納物として一般に神社に備わる鳥居、幟杵石、手水舎、灯籠、狛犬のような主要奉納物と、石碑や戎などその他の付属奉納物が見られる。写真1は久留米市宮ノ陣の宮ノ陣神社に見られる奉納物の例である。奉納物に関して、種類、材質、奉納年、記載内容や状態を確認した²⁾。結果を定型の奉納物とそれ以外の奉納物に区分し、25年間に区切った奉納時期別の数変化を検討する。定型の奉納物に関してはその割合変化も追跡した。また調査を振り返り、文化財としての持続が懸念される内容に関し、写真を交えて報告する。



写真1 宮ノ陣神社の奉納物例

Ⅲ. 奉納時期別に見た奉納数の変化

Ⅲ. 1 定型の奉納物

図2は、幟杵石（166個）、鳥居（177個）、手水舎（135個）、灯籠（307個）、狛犬（172個）の、定型の奉納物（計1264個）の奉納時期別の数を示す。対で奉納されることが多い狛犬や灯籠は、対も単独も1個で計上した。また奉納数の多い石碑（307個）も図に含めている。

単年毎では傾向が見えにくいため、奉納物全体を4半世紀毎、25年の時期別に見る。1750年以

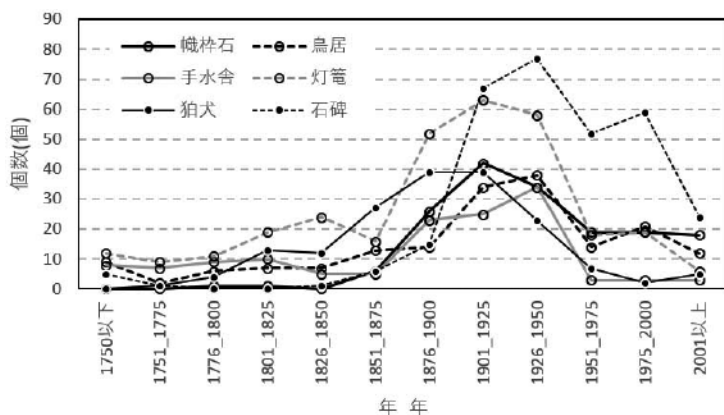


図2 定型の奉納物の奉納時期

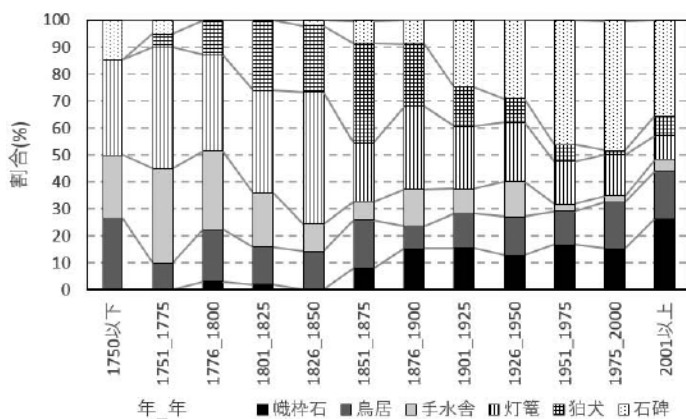


図3 定型の奉納物の種別割合変化

前は34個、1751～1775年は20個、1776～1800年は31個、1801～1825年は50個、1826～1850年は49個、1851～1875年は73個、1876～1900年は169個、1901～1925年は270個、1926～1950年は264個、1951～1975年は113個、1975～2000年は123個、2001年以降は68個である。仮に一定期間に奉納が同数あり、経年劣化による廃棄や更新のあることを思えば奉納物は古い時期程減少するだろう。しかし近年の奉納物数の減少は極めて異常であり、逆に、近年を正常とすれば、1876年から1950年までの奉納物数が異常に多い。

幟杵石、鳥居、手水舎、灯籠、狛犬は、1876～1900年から1926～1950年までの期間、奉納物数が大変多い。これは戦争関連での奉納物であることは既報²⁾で示した。しかし奉納ピークの早い順に狛犬が1876～1900年、幟杵石と灯籠が1901～1925年、鳥居と手水舎が1926～1950年となっており奉納時期には明らかな相違がある。また、石碑の奉納は、1901～1925年から1975～2000年まで50個以上が継続しており、奉納数の多い期間は他より長い。これは第二次世界大戦後に、奉納目的が国威発揚から別途変化し主に石碑としての奉納が継続していることを意味する。

ただ奉納ピークは奉納数全体の増加に影響を受ける可能性があるため、奉納物種別の割合を時期別にグラフ化し（図3）、奉納ピークの意味をより鮮明化する。奉納割合の高い時期は、幟杵石

は2001年以降、鳥居は1750年以前、手水舎は1751～1775年、灯籠は1826～1850年、狛犬は1851～1875年、石碑は1901～1925年にある。時系列的な変化を見ると、石碑の他に幟杵石は増加傾向、手水舎と灯籠と狛犬は減少傾向、そして鳥居はほぼ一定割合で推移している。いずれ神社の景観要素が、鳥居と幟杵石と石碑が定型となる未来が来るように思われる。

このように奉納物数は1876年から1950年までの期間大変多いが、奉納数の多い時期は種別に相違があり、つまり奉納には流行がある。またその奉納自体、明治維新後は各種奉納物による国威発揚に主目的があったが、第二次世界大戦後は石碑を中心とする奉納に変わりその目的も変化した。

Ⅲ. 2 定型以外の奉納物及び石碑等の奉納目的

奉納種別に見た奉納時期の相違と目的について、定型以外の奉納物（写真2）を中心に考える。図4は、撫牛（16個）、猿田彦（16個）、戎（9個）、庚申（3個）の奉納時期別の数を示す。さらに石碑を含めた定形の奉納物に示された目的を参考に、伊勢関係（55個）、皇紀2600（9個）、天皇・元号（31個）、戦争（41個）の奉納物に細分し、別途計上した。合計180個である。皇紀2600とは、昭和15年が神武天皇の即位2600年を祝するためにその年号や用語が刻まれている奉納物を意味する。その他の奉納物として、形状は鳥や馬の像、偉人像、砲弾像、土俵など、目的は敬老



写真2 定型以外の奉納物例

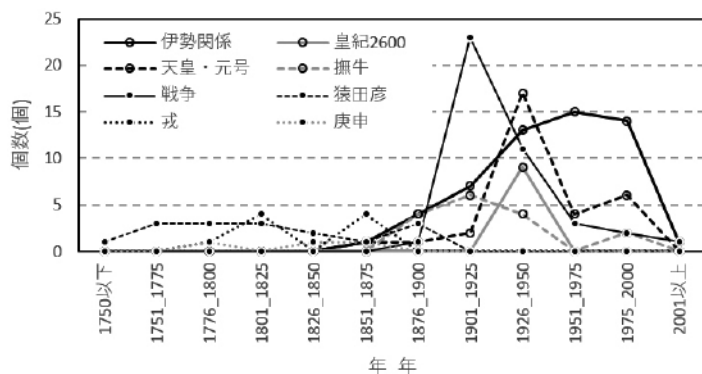


図4 定型以外の奉納物の奉納時期

関係、女性農事組合、事業記念などもあったが数が少ないため集計分析は行っていない。

撫牛は、境内に横たわる牛（臥牛）像で全長1m前後あり、天満系の神社を中心に见られる。この牛は祀られた菅原道真の生没や仏教との関りがあるとされている³⁾。猿田彦は、お稲荷さん、庚申さん、道祖神として祀られる神様⁴⁾であり、調査地では猿田彦大神の文字が刻まれている板状で高さ1m前後の石碑が多い。戎は、大漁、商売繁盛、豊作の神様であり、このえびす信仰の神像が境内片隅に置かれている。左手で鯛を抱え右手に釣り竿をもつ笑顔の人物像で知られるが、そのイメージは12世紀以降少しずつ変化し今に至るとされる⁵⁾。実際手に竿を指す穴は見られたが竿自体が残るものはなかった。庚申は、大凡角柱の石材にその文字が刻まれているものを計上した。個数が少なく系統的には奉納契機は不明である。庚申塔は庚申信仰に基づく祈願や供養目的の石仏とされており、その一つに猿田彦の文字を刻む石塔も挙げられている⁶⁾。

当該奉納物全体を時期別に見ると、1750年以前は1個、1751～1775年は3個、1776～1800年は5個、1801～1825年は7個、1826～1850年は3個、1851～1875年は8個、1876～1900年は13個、1901～1925年は38個、1926～1950年は54個、1951～1975年は22個、1975～2000年は24個、2001年以降は2個である。定型の奉納物と異なり、1876年から1950年までの期間の奉納数増加は特に目立たず、1926～1950年を中心に1901年から2001年以降まで全体的に多い。

奉納物の種・目的別に奉納時期を見ると、奉納ピークの早い順に撫牛と戦争は1901～1925年、天皇・元号と皇紀2600は1926～1950年、伊勢関係は1951～1975年になっており奉納時期に相違がある。一方、猿田彦は1751年以降1900年までに多く、戎は1801年以降1875年までに多く、庚申は1776年以降1875年までに3個と数が少なく不明瞭である。さらに時系列的な変化を見ると、奉納ピークが同じでも、グラフ増加と減少の終始と加減速には奉納物間での相違が大きく、目的別に見て奉納流行には特徴がある。たとえば伊勢関係は、1851～1875年に初めて1個が奉納され、徐々に増加し1926年以降2000年までに13個、15個、14個と定常的に奉納されたが2001年以降には1個しかない。これは2001年以降、伊勢参宮に関わる何らかの社会条件が急変し奉納流行が一気に消滅したことを示す。なお小野寺（2005）⁷⁾によれば、伊勢神宮参拝に関わる講、伊勢講は高度経済成長期を経過し全国的には減少したとされる。また同文献によれば講は今回の対象地にほとんど計上されていない。しかし対象地では少なくとも高度経済成長期の後20世紀末までは参拝を目的とする何らかの組織が継続し、21世紀に入って消滅したことになる。

終戦を挟んで国威発揚に使用されたと考えられる戦争と天皇・元号及び皇紀2600を目的とする奉納物を考えてみる。戦争は、記載には日清、日露、日独、日中、大東亜等数多くの名目があり、奉納数は1901～1925年に前時期に比べ急増するが、その後は1975年までに急減する。実際第二次世界大戦後は、戦没、忠霊の名目で慰霊を目的とする奉納物に変わった。また天皇・元号と皇紀2600は、奉納数は1926～1950年に前時期から急増する。天皇・元号の奉納物は、次時期に急減するが、象徴天皇制の下で皇族来訪や改元を契機とする奉納が継続した。しかしその奉納物も2001年以降1個しか確認できず奉納流行は消滅した可能性がある。

このように定型以外の奉納物はその奉納時期で見ると、それぞれ流行が見られる。古い順に猿田彦、庚申と戎、戦争と撫牛、皇紀2600、天皇・元号、伊勢関係となる。またその盛衰の加減速にはそれぞれ特徴がある。また戦争と天皇・元号及び皇紀2600に関して見ると、第二次世界大戦前にその目的は国威発揚にあったが、終戦を通じて慰霊や国民統合への祈りへと目的が変化した。

そして、時の経過に伴って、慰霊と国民統合への思いが急速に衰退しているように見える。

IV. 文化財としての持続が心配される件

IV. 1 材の風化と対応

既報²⁾によれば、当該地域の奉納材は地域特性を反映し溶結凝灰岩と花崗岩が中心で、その割合は古くは溶結凝灰岩が多く、近年ほど花崗岩が増す。その他、変成岩、花崗岩（黒）、溶結凝灰岩（黒）、凝灰質砂岩、コンクリート、金属に区分できる。表層風化の進行が遅く300年前でも文字判別が容易な溶結凝灰岩（黒）に対し、表層風化の速さに加え表層剥離も加わり100年程で文字判別が難しくなる凝灰質砂岩など、石材別に風化の特徴や速度には違いがある^{8), 9)}。そこで材の風化に対し、維持に注意が必要な3例を紹介する（写真3）。



写真3 材の風化と対応例

破損しやすい奉納物の代表は幟柱立である。通常幟柱立は時間間隔を置いて複数奉納されており古いものは破損した状態で残されている神社が多かった。また祭事で毎回設置する幟に用いる材（木や竹）も保存と管理に手間を要する。このため、写真3（1）の木本宮（大木町八町牟田）のように恒久的な金属製の幟柱立に加え金属製（ステンレスやアルミ）の幟ポールが設置されている神社も比較的目立った。恐らく都市化の進展と管理が難しくなった屋敷林の竹林に伐採が進んだことも背景にあると思われる。昭和時代中期はコンクリートによる鳥居、玉垣、手水舎、石碑が多く奉納されており、それらは2020年現在、他の石材に比べて風化進行が著しく速く既に文字の判別が困難なものが多かった。また灯籠は火袋が構造上弱く破損したものや欠落したものも散見された。火袋の補修がなされた灯籠もあるが、老松宮（久留米市北野町中島）のように多くはコンクリート製（写真3（2））であり、経済的な苦労がしのばれる。これらコンクリート奉納物に止まらず、木造の社殿もコンクリート作りに転じた祇園神社（久留米市田主丸町片ノ瀬）もあり、維持の難しい木造から恒久的なものに転換することを氏子が選択したと思われる。また境内には江戸時代までの神仏習合の名残で明治期の神仏分離を免れたと思しき仏教関連の仏像や墓碑が残る神社も散見された。写真3（3）は、玉垂神社（柳川市弥四郎町）の2人の僧侶が彫られ

た石碑である。いずれも風化の進行とともに字等の判読は難しくなっている。また各奉納物ともに文字への墨入れ処置もほとんど見られなかった。

このように、ローカルな神社では、歴史的な奉納物も散見されるが、露天のため材の経年風化を止めることは容易ではない。その風化に対して経済的利点のあるコンクリートや長期維持を期待できる金属に材を変化させ管理を容易にする工夫が進められている。

IV. 2 管理不十分な現状

材の風化に対する修理や更新がなされない場合、神社景観は次第に変化していく。ここでは奉納物の劣化による神社景観の残念な現状を4例示す（写真4）。



写真4 管理不十分な現状例

様々な要因で破損の生じた奉納物が修理されないまま放置される現状が多かった。写真4(1)は石材劣化で破損した玉垣の補修がなされない天満神社（久留米市城島町浜）である。ここは地域景観のクリークが隣接する場であるが、神社境内縁に地盤変状も生じており、フェンスで変状地への立ち入り制限がなされるのみで補修される兆候がない。特殊な奉納物他の変状として自然災害によるものもある。平成3年（1991年）台風19号の強風による被害を受けた社殿が多かった²⁾。その修理方法には、材木覆いで社殿を囲む修復と、鉄骨で倒壊を防ぐための支えを取り付ける応急処置とがあった。後者の中に既に傾斜している状況の社殿もあり、八幡宮（朝倉市上金丸）のように放置されている（写真4(2)）。また柳川市南部の軟弱地盤の分布域では、地震での揺れが周囲より増す傾向にあり、そのことを示す奉納物の破損や変状が散見された。たとえば2019年1月の地震（熊本県和水町を中心とする地震）の変状として、石材の継ぎ目に破損が見られる大己貴神社（大川市中八院）や、左10度回転した愛宕神社（柳川市大和町徳益）の灯籠（写真4(3)）がある。後者は付近住民への聞き取りでは変状が認知されておらず、補修されることは今後ないと思われる。柳川市を中心に楼門を構える神社が多く地域文化を伝える重要な施設と見なされて

いる。しかし天満宮（久留米市城島町内野）のように楼門の劣化（写真4（4））に止まらず内部の随身にも塗装剥落等の劣化が散見され、また随身に並置される狛犬も同様に維持が難しくなっている。さらに狛犬の代わりに戎が多数並置される神社もあり、文化継承の難しさが楼門景観には現れている。その他、剪定や更新等の管理が不十分で鬱蒼と茂る照葉樹だけの社叢林を持つ神社景観に至るものはまだしも、社叢林の多くが伐木され管理の必要性が薄れた場合も見られた。これら管理の難しい現状を持つ集落実態に関する宗教社会学的調査が既に行われ、その結果は書籍として出版されている¹⁰⁾。

このようにローカルな神社の奉納物は、劣化、破損、変状したままの未修理放置が目立っており、氏子による管理が十分に至らない近年の文化継承の難しさを示している。

Ⅳ. 3 神社空間利用の変化

神事や祭事の方と考えられる神社空間の近年の利用に着目する。そこにはぶらんこやすべり台等が設置された児童公園が多く見られるが、遊具に興じる児童や幼児を見ることは少なく、その老朽化が進んでいた。グランドゴルフ場が設置され、そこでは高齢者が集う様子を見ることが多かった。さらに分別ゴミ集積場の設置も目についた。写真5（1）は老朽化した遊具、資材倉庫、分別ゴミ集積場の設置された住吉宮（大木町土甲呂）である。つまり時代に合わせ、生活に必要な公共機能を神社空間が担うように変化してきた様子が伺える。また大きな神社では社務所が付随するが、ローカルの神社は敷地が広くなく、それが無いか資材倉庫に置き換えられている。また社務所ではなく公民館が設置される例も多かった。驚くべきことに天神社（大刀洗町鶴木）のように拝殿が公民館と同化し小規模な本殿が付属する形状に改修された例も複数あった（写真5（2））。

このように近年の神社空間では、少子高齢化のような地域社会の変化に応じて社殿や境内はその景観を穏やかに確実に変化させてきている状況にある。



写真5 神社空間利用例

V. まとめ

本稿では、筑紫平野の139社の奉納物や付属施設に関し現況調査を行った結果の中から、奉納物などを文化財的な物として見た場合の、現状と課題を整理した。

- 1) 1876年から1950年までの期間、奉納物数は大変多いが、多い時期は種別に相違がある。またその奉納自体、明治維新後は国威発揚目的の様々な奉納物であったが、第二次世界大戦後は石碑を中心とする奉納に変わった。
- 2) 定型以外の奉納物の奉納時期にはそれぞれ流行が見られる。古い順に猿田彦、庚申と戎、戦争と撫牛、皇紀2600、天皇・元号、伊勢関係となる。またその盛衰の加減速にはそれぞれ特徴がある。
- 3) 戦争と天皇・元号及び皇紀2600に関して見ると、終戦を通じて慰霊や国民統合への祈りへ目的が変化し、時の経過に伴ってその思いは急速に衰退している。
- 4) 神社では奉納物の経年風化を止めることは容易ではなく、ローカル地域では、劣化、破損、変状したままの未修理放置が目立ち、氏子による管理が十分に至らない文化継承の難しさを示している。その風化に対して経済的利点のあるコンクリートや長期維持を期待できる金属に材の変化が進み始めた。
- 5) 近年の神社空間において、少子高齢化のような地域社会の変化に応じて社殿や境内はその景観を穏やかに変化させてきている。

本報告では、地理総合を含む社会科教育で近年鍵語とされる「持続可能社会」を念頭に置きながら、地域持続の指標となるローカルな神社の空間持続に着目した。報告したこれら福岡県筑紫平野一部の傾向が他地域でも同様なのか、日本全体での傾向になっているのかは、調査を開始したばかりのため、今後追究したい。

謝辞

神社を対象とする調査は2018年に開始したため、筆者自身、神社関連事項に関する理解はまだ十分ではなく、専門研究の皆様方からは叱責を賜る内容も多いと考えている。しかし九州ローカルの神社奉納物の惨状を前に、本邦の文化消失が地方から進み始めていることを実感し、何かの記録を残さなければという思いに駆られていた。その矢先に本学文学部の米田先生にこの執筆場を紹介いただいた。現地調査では、西南学院大学名誉教授の磯望先生、土木研究所主任研究員の品川俊介様、福岡教育大学教授の杉村伸二先生に多くのアドバイスを頂戴した。支援いただきました皆様に対し、ここに記して謝意を表します。

【参考文献】

- 1) 黒木貴一・品川俊介（2020）：神社に着目した山地斜面の安全性と災害情報。第10回土砂災害に関するシンポジウム論文集，151-156.
- 2) 黒木貴一・杉村伸二（2021）：筑後川下流域の神社奉納物によるローカル地域の見方。福岡教育大学紀要，第70号，第2分冊，1-10.

- 3) 島田弘巳 (2013) : なぜ八幡神社が日本でいちばん多いのか. 幻冬舎, 295p.
- 4) 飯田道夫 (1998) : サルタヒコ考 — 猿田彦信仰の展開 —. 臨川書店, 224p.
- 5) 吉井貞俊 (1989) : えびす信仰とその風土. 国書刊行会, 416p.
- 6) 芦田正次郎 (2012) : 路傍の庚申塔 — 生活のなかの信仰 —. 慶友社, 198p.
- 7) 小野寺淳 (2005) : 伊勢参宮における講組織の変容. 歴史地理, 47-1, 4-19.
- 8) 松倉公憲・高屋康彦・小口千明 (2002) : 光明寺墓石外柵に使用された花崗岩の風化について. 筑波大学陸域環境研究センター報告, 2, 31-36.
- 9) 松倉公憲 (2017) : 地形学からみた風化研究の問題点と今後の課題. 地学雑誌, 126-3, 271-296.
- 10) 冬月 律 (2019) : 過疎地神社の研究 — 人口減少社会と神社神道 —. 北海道大学出版会, 323p.